

# 議員全体視察研修報告書



( 大仙市役所前にて )

平成 29 年 10 月

# 議員全体視察研修報告書

## 目次

<b>I 視察報告概要</b> .....	<b>1</b>
1 視察日程.....	1
2 視察先及び視察事項.....	1
3 視察の目的.....	1
4 大仙市の取り組み.....	1
5 男鹿半島・大潟ジオパークについて.....	2
6 視察参加者.....	2
7 視察研修の様子.....	2
<b>II 視察内容</b> .....	<b>3</b>
1 小中学校における学力向上の取り組みについて.....	3
（1）大仙市の概要.....	3
（2）秋田県の学力について.....	3
▶ 過去と現在.....	3
▶ 平成29年度全国学力テスト結果について ～ 茨城県と秋田県 ～.....	3
（3）学力向上に向けた秋田県の取り組みについて.....	5
▶ “一人勉強”という名の家庭学習.....	5
▶ 家庭学習（一人勉強）が定着した理由.....	5
▶ 授業スタイルの共有.....	5
▶ 学力向上の3つの要因.....	5
（4）大仙市の取り組みについて.....	6
▶ 大仙市教育大綱.....	6
▶ 大仙市学校教育の具体的な事業（平成29年度大仙市の学校教育から）.....	7
▶ 大仙市での研修の様子.....	10
2 男鹿半島・大潟ジオパークのテーマと特徴について.....	11
（1）男鹿市の概要.....	11
（2）大潟村の概要.....	11
（3）男鹿半島・大潟ジオパークのテーマとエリア.....	12
（4）男鹿半島・大潟ジオパークの魅力.....	12
（5）男鹿半島・大潟ジオパークの活動記録.....	12
（6）男鹿半島・大潟ジオパークのジオサイト.....	14
（7）帆引き船と八郎潟.....	16
<b>III 感想等 ～ 視察を終えて ～</b> .....	<b>17</b>
1 小中学校における学力向上の取り組みについて.....	17
2 男鹿半島・大潟ジオパークのテーマと特徴について.....	19

# Ⅰ 視察報告概要

## 1 視察日程

平成 29 年 10 月 11 日（水）～13 日（金）

## 2 視察先及び視察事項

(1) 秋田県大仙市

- ・ 小中学校における学力向上の取り組みについて

(2) 秋田県男鹿市・大潟村

- ・ 男鹿半島・大潟ジオパークのテーマと特徴について

ア 寒風山

イ なまはげ館・男鹿真山伝承館

ウ 八望台

エ 入道崎

オ ゴジラ岩

カ 大潟村干拓博物館



（大仙市役所本庁舎）



（寒風山回廊展望台）



（なまはげ館）



（男鹿真山伝承館）



（入道崎）



（ゴジラ岩）



（大潟村干拓博物館）

## 3 視察の目的

文部科学省が平成 19 年(2007 年)から全国の小学 6 年生と中学 3 年生全員を対象に毎年 4 月に行っている全国学力・学習状況調査(以下「全国学力テスト」という。)において、都道府県別順位で常に秋田県は最上位にランクされている。

そこで、秋田県の中でも特に小中学校における学力向上の取り組み、大きな成果を上げている大仙市を視察先とし、その取り組み内容や課題などを調査し、本市における教育活動をより一層充実させ、学力の向上を目指すことを目的とするものである。



（大仙市役所内での視察研修の様子）

また、平成 23 年(2011 年)に日本ジオパーク委員会によって認定されました男鹿半島・大潟ジオパークの活動内容を調査するため、同県男鹿市及び大潟村の拠点施設などを視察し、本市のほか 5 市などが連携して広域的に取り組んでいる筑波山地域ジオパーク※<sup>1</sup>の発展に寄与することを目的とするものである。

## 4 大仙市の取り組み

大仙市では、「生きる力を育み、社会を支える創造力あふれる人づくり～共(ともに)創(つくる)考(かんがえる)開(ひらく)～」を教育目標に掲げ、「基礎となる力」「学ぶ力」「活かす力」の 3 つの力をキーワードに、生きる力としての総合的な学力を育む学校教育の推進並びに地域活性化に寄与できる子どもの育成を目指し、教育目標の達成に向けたさまざまな教育事業に取り組んでいる。また、各中学校区の特徴ある教育活動をまとめた「大仙教育メソッド」を平成 28 年度に作成し、教育委員会と各学校との間で情報の共有を図っている。

※1 本市、つくば市、石岡市、笠間市、桜川市、土浦市からなるジオパークで、平成 28 年(2016 年)9 月に日本ジオパークに認定された。テーマは、「関東平野に抱かれた山と湖～自然と人をつなぐ石・土・水～」である。

## 5 男鹿半島・大潟ジオパークについて

約 30 km 四方の比較的コンパクトなジオパークで、日本列島が大陸から分かれ、日本海を形成し、大規模な気候変動による環境の移り変わりを経て今日に至った過去 7,000 万年間の大地の歴史を、ほぼ連続して観察できる地層が揃っている。

また、日本最大の潟湖「八郎潟」から誕生した日本最大の干拓地大潟村は、他のジオパークにない「大地と人の物語」に恵まれている。(ジオパーク全国大会の期)

なお、当ジオパークは、本年 10 月 25 日(水)から 27 日(金)までの 3 日間にわたり、全国のジオパーク関係者が一堂に会する「第 8 回日本ジオパーク全国大会」が開催される。



## 6 視察参加者

議長	中根光男
副議長	古橋智樹
議員	藤井裕一
議員	矢口龍人
議員	鈴木良道
議員	加 固 豊 治
議員	小松崎 誠
議員	田 谷 文 子
議員	岡 崎 勉
議員	川 村 成 二
議員	来 栖 丈 治
議員	設 楽 健 夫
議員	宮 嶋 謙
議員	櫻 井 繁 行



(大潟村干拓博物館前にて)

随 行 前 島 嘉 美 (議会事務局長)

随 行 神 野 厚 (局長補佐)

## 7 視察研修の様子



視察第 1 日目は、男鹿半島・大潟ジオパークのテーマと特徴を調査するため、男鹿市及び大潟村の拠点施設などを視察した。

視察第 2 日目は、小中学校の学力向上の取り組みを調査するため、大仙市役所を訪問。視察研修は、同市役所 3 階大会議室で行われ、その冒頭、茂木隆大仙市議会議長から歓迎のあいさつと大仙市政に関する説明があり、その後、吉川正一教育長などから秋田県並びに大仙市における小中学校の学力向上の取り組みについて説明を受けた。



(歓迎のあいさつをする茂木議長)

## II 視察内容

### 1 小中学校における学力向上の取り組みについて

#### (1) 大仙市の概要

- 市制施行 平成17年(2005年)3月22日(平成29年は市制12年目)
- 人口 83,599人(平成29年4月末現在)  
(男39,207人、女44,392人)
- 世帯数 31,374世帯(平成29年4月末現在)
- 面積 866.77km<sup>2</sup>
- 概要 平成17年(2005年)3月22日に、大曲市と周辺7町村が合併して誕生した大仙市は、秋田県の内陸部に位置し、古くから交通の要衝として発展し、秋田新幹線が整備されるなど、現在も交通の拠点となっている。



(大曲の花火)

また、同市は、秋田県を代表するブランド米「あきたこまち」の一大生産地であり、毎年開催される大曲の花火大会は日本三大花火大会のひとつで、大会当日には全国から見物客が訪れる。

平成29年4月現在、市立小学校は21校(児童数3,577人)、市立中学校は11校(生徒数1,866人)で、平成29年度全国学力テストにおいて、小中学校ともに教科に関する調査及び生活習慣・学習環境に関する調査結果は、いずれも全国や秋田県の平均を上回っているという。

#### (2) 秋田県の学力について

##### ▶ 過去と現在

全国学力テストは、1960年代に「全国中学校一斉学力調査」として行われ、そのころの秋田県の学力は「全国最低レベル」だったという。

その後、さまざまな学力向上に向けた施策を継続的に実施し、平成19年(2007年)に復活した全国学力テストで全国第1位となり、ここ数年、都道府県別の平均正答数をみると、秋田県が成績トップを維持し続けている。

##### ▶ 平成29年度全国学力テスト結果について ～ 茨城県と秋田県 ～

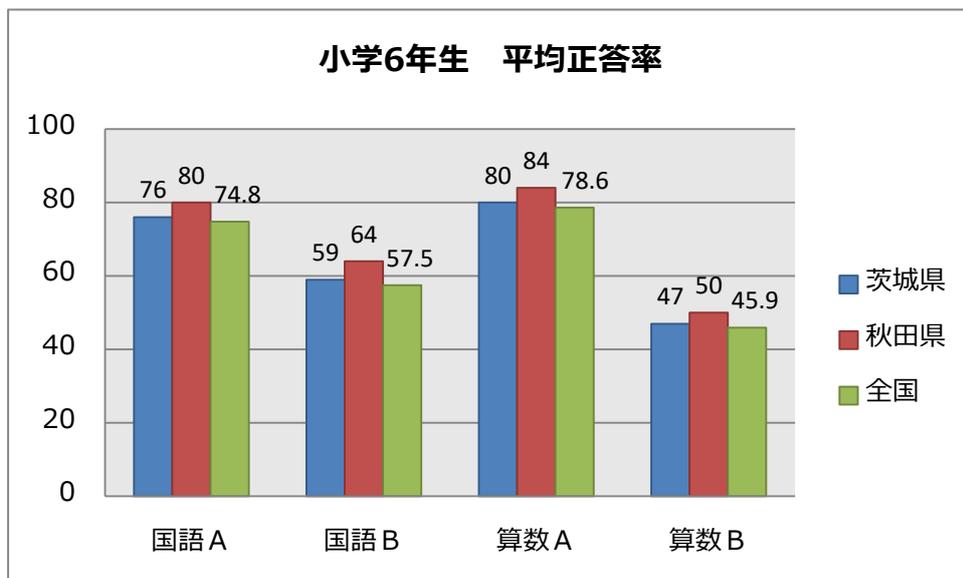
平成29年(2017年)4月18日(火)に実施され、文部科学省が8月28日(月)に公表した茨城県と秋田県の全国学力テスト結果は次のとおりである。

##### ア 小学6年生

(国立教育政策研究所：実施概況 小学校 全国一都道府県(公立))

	平均正答率(%)			
	国語A	国語B	算数A	算数B
全国(公立)	74.8	57.5	78.6	45.9
茨城県	76.2	58.6	80.8	46.9
平成29年度順位	第13位	第14位	第8位	第11位
平成28年度順位	第19位	第17位	第18位	第13位

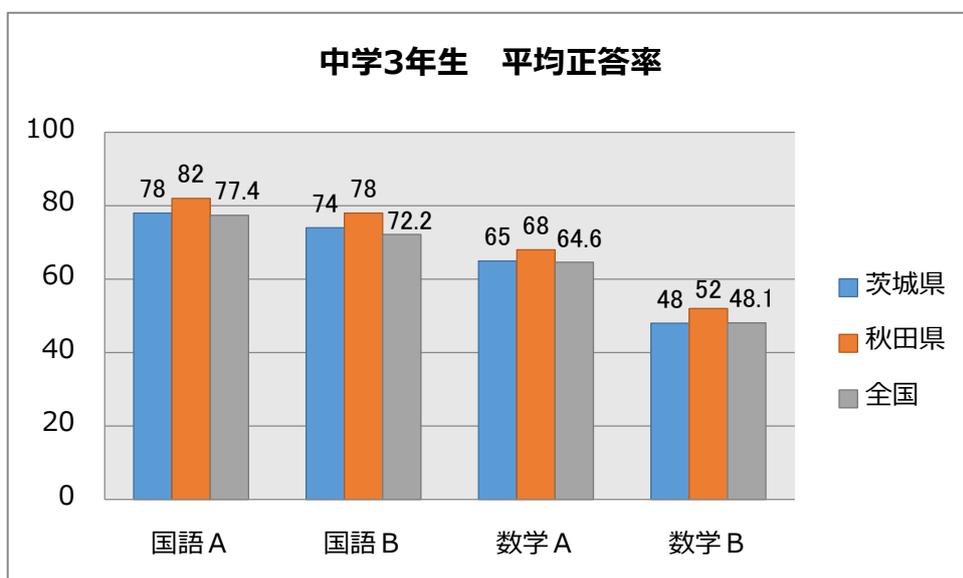
秋田県	80.0	64.0	84.0	50.0
平成29年度順位	第1位	第1位	第2位	第3位
平成28年度順位	第3位	第1位	第1位	第2位



イ 中学3年生

(国立教育政策研究所：実施概況 中学校 全国一都道府県(公立))

	平均正答率(%)			
	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
全国 (公立)	77.4	72.2	64.6	48.1
茨城県	78.3	73.9	65.2	48.3
平成29年度順位	第15位	第8位	第19位	第19位
平成28年度順位	第7位	第7位	第31位	第17位
秋田県	82.0	78.0	68.0	52.0
平成29年度順位	第1位	第1位	第3位	第3位
平成28年度順位	第1位	第1位	第2位	第4位



### (3) 学力向上に向けた秋田県の取り組みについて

#### ▶ “一人勉強”という名の家庭学習

秋田県では、以前から家庭での学習習慣の確立を目的として、一人勉強という名の家庭学習が続けられている。

一人勉強については、小学校入学後の適切な時期に時間の目安や内容等の大まかな指導を行い、一人勉強の手引などを活用して保護者にも理解とその支援を求めている。



(一人勉強ノート)

子どもたちは少しずつ一人勉強の内容を自分で決め、漢字、計算練習やその日の復習などをノートにまとめ、翌日、学級担任そのノートを提出。ノートの提出を受けた担任は、その日のうちに一人勉強ノートに目を通し、サインやコメントを書き入れた後、そのノートを子どもに返却する仕組みが確立されている。

この一人勉強は、小学校のみならず中学校でも実施されており、ノートチェックは、時に学級担任だけでなく、学年主任や管理職の先生も担当する学校もある。この一人勉強を通じて、子どもと教師のみならず、子どもの家庭学習を支援する立場として保護者もかわり、それぞれがつながるツールとして、その重要性はさらに増している。

#### ▶ 家庭学習（一人勉強）が定着した理由

一人勉強という名の家庭学習は、子どもたちの親の代から続けられているので、学校も保護者もその学習を行うことが当たり前になっているため、今後も定着していかねばならない。また、教育上支援が必要な子どもたちにも丁寧に対応している。

#### ▶ 授業スタイルの共有

授業スタイルもすべての学校で共有している。どの学校に行っても、学習内容とその目的がわかるようにしておくことを徹底し、10年かけて構築。

#### ▶ 学力向上の3つの要因

##### ・ 家庭でよい生活習慣の維持

近年、生活スタイルの多様化に伴って、朝食を摂らなかつたり、夜更かしが増えたりするなど子どもたちの生活が乱れてきているが、秋田県には他県に比べ昔ながらのよい早寝早起き朝御飯といった基本的な生活習慣が保たれている。

##### ・ 基礎学力の定着

家庭学習の継続、県独自の学力テストの実施、少人数学習<sup>※2</sup>の導入など、子どもの個性を生かし、子どもの多様性に応える教育活動を継続的に実施。

##### ・ 県全体で家庭教育を支援

秋田県では、地域住民や民間企業などが家庭学習の重要性を理解し、県全体で家庭教育を支援している。

※2 基本的な生活・学習習慣の定着や安定した学校生活の確保するため、小学1年から3年まで及び中学1年は、1学級あたり30人程度。また、基礎学力の定着・向上を図るため、小学4年から6年まで及び中学2年並びに3年は1学級あたり20人程度。なお、大仙市では、学習のねらいや実態に応じて1学級に複数教員を配置するティームティーチングを導入するなど指導形態を工夫している。

## (4) 大仙市の取り組みについて

### ▶ 大仙市教育大綱

大仙市では、平成28年(2016年)3月1日に大仙市教育大綱<sup>※3</sup>を策定し、次の3項目を推進している。

#### 1 豊かな心と健康な体を育む学校づくり

▶ 子どもの「心の居場所」が確保された環境づくり

- ① 思いやりの心や奉仕の心など、他者と共に生きる豊かな心や態度を育成します。
- ② 教育上支援が必要な子ども一人一人への支援の充実に努めます。
- ③ 不登校やいじめ等の問題行動の未然防止と早期発見・即時対応等に努めます。
- ④ 体力の向上や心身の健康の保持増進を図るための食育を推進します。
- ⑤ 学校規模適正化等も含めた教育環境整備に努めます。



#### 2 主体的でグローバル化な学びを進める学校づくり

▶ 確かな学力による探究する子どもの育成

- ① 夢や希望をもち、志高く努力する姿勢を育成します。
- ② 体験活動を重視し、総合的な学力を育成します。
- ③ 学び合う楽しさと分かる喜びを実感させ、学ぶ意欲の喚起と育成に努めます。
- ④ 基礎・基本を身に付けて、グローバルな視野で主体的に学びを深める資質・能力を育成します。
- ⑤ 学校図書館やICT等を有効に活用して探究する資質・能力を育成します。



#### 3 家庭・地域と一体となった開かれた学校づくり

▶ 地域に根ざしたキャリア教育の推進

- ① ふるさと教育を基盤としたキャリア教育を推進し、持続可能な社会づくりに貢献する人材を育成します。
- ② 校種間の連携を一層推進し、「交流と連携」による特色ある教育活動の充実に努めます。
- ③ 職場体験・ボランティア活動などを通して、自己の生き方を考えるキャリア教育を推進します。
- ④ 地域が一体となって子どもを育てる体制の整備に努めます。
- ⑤ PTA連合会の活動と学校支援活動事業の活用の拡充を図ります。



※3 平成27年(2015年)4月に施行された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」に基づき、大仙市長と教育委員会を構成員とする総合教育会議を設置し、地方教育行政の組織及び運営に関する法律(昭和31年法律第162号)第1条の3第1項の規定により市長に策定を義務付けられた大仙市教育大綱案を協議し、この協議を経て平成28年3月1日付で大仙市長が策定した。市民にも分かりやすいように大綱を要約した「大仙市の教育大綱【概要版】」も作成。

▶ 大仙市学校教育の具体的な事業（平成29年度大仙市の学校教育から）

学校教育の具体的な事業

**共**に支え合う力の育成

基盤となる学習環境等を様々な面から支えていく施策等

ふるさと教育の推進



■地域の教育力を生かし、豊かなかかわりの活動を推進し、心豊かで郷土愛に満ちた人間を育成します。

- ・体験的学習の時間支援事業
- ・学校支援地域本部との連携
- ・自然や文化、専門家や達人に触れ合う機会の充実
- ・社会科副読本や大仙市地図の活用

学校生活支援の充実

■子どもが安心して学べる学校生活を支援します。

- ・学校生活支援員等（59名）の配置
- ・特別支援教育アドバイザー（1名）の配置
- ・学校支援地域本部事業の推進  
（神岡小、協和小、大曲小、西仙北小、中仙小、太田南小、南外小、高梨小、大曲西中、大曲南中）
- ・市PTA連合会による相互の交流・連携の推進

教育相談体制の整備と相談活動の充実

■子どもや保護者の悩みに応え、安心して過ごせる学校づくりを支援します。

- ・スクールカウンセラーや心の教室相談員の配置
- ・適応指導教室「フレッシュ広場」の開設  
フレッシュカウンセラー（臨床心理士等）の配置
- ・いじめ等に関する実態調査の実施
- ・たんぼぼダイヤル（相談電話）の設置
- ・就学や教育に関する相談会の実施

**考**え、生かす力の育成

授業を核とした学びの深まり・広がりを進める施策等

学ぶ意欲を高める指導の充実

■児童生徒の関心・意欲を高める授業づくりを進めます。

- ・T T（チームティーチング）や少人数学習、小学校での教科担任制等の指導の工夫
- ・タブレット等のICTを活用した指導の工夫

学力・心力・体力を高める学びの創造

■児童生徒の学力の現状と課題を把握し、授業改善の方向性を提示します。

- ・全国学力・学習状況調査、秋田県学習状況調査の実施
- ・学力向上推進委員会による結果の分析と授業改善への提案及びフォローアップシートの提供



■研究指定校等の取組をモデルとして他校に発信します。

- ・（国立教育政策研究所指定）教育課程研究指定校事業（ESD：大曲南中）
- ・（県指定）道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業（いのちの教育あったかエリア事業）（平和中・神岡小）

■体力の向上や健康の維持増進を図る取組を推進します。

- ・全国体力・運動能力、運動習慣等調査及び新体力テストの実施と分析
- ・食育年間計画を活用した活動の推進

学習活動への支援

■学びを豊かにするために、学習活動を支援します。

- ・教育専門監（5名）による魅力ある授業の提示
- ・ALT（8名）・CIR（1名）の配置
- ・日本語指導支援員（1名）・模範学級支援員（2名）の配置

## 創造的に生き抜く力の育成

子どもたちの意欲を高め、未来を見据えた学習環境をつくる施策等

### キャリア教育の推進

- 夢や志をもち、その実現のために意欲的に努力する児童生徒を育成します。
  - ・キャリア教育推進「総合的な学力育成」事業（教育アドバイザー1名の配置）
  - ・9年間を見通したキャリア教育指導計画の整備及び実施
  - ・コロンブスの卵わくわくサイエンス事業
  - ・「大仙ふるさと博士育成」事業

### 国際理解・国際交流活動の推進

- 異文化理解を通して、子どもたちの視野を広げます。
  - ・中学生海外派遣事業（オーストラリア）
  - ・大仙グローバルジュニア育成事業（グローバルジュニア・マイスター事業、英語教育アドバイザー1名の配置、ALT8名・CIR1名の配置他）
  - ・国際教養大学との交流活動
  - ・韓国青少年等との国際交流事業



### 生徒会活動の連携

- 学校、家庭、地域が同じテーマで実践し、生活や学習習慣の向上を図ります。
  - ・こころふれあう さわやか大仙事業
  - 中（小）学生サミットの実施

### 豊かな心・創造力を育む教育の充実

- 子どもの豊かな情懐の涵養を図り、主体性や創造力を育みます。
  - ・小・中学校芸術鑑賞事業の実施
  - ・こころのプロジェクト「夢の教室」（小・中学校）
  - ・「大仙っ子読書の日」11月木曜みんなで読書

## 開き、信頼される学校

学校と地域、学校と学校、教員同士を結ぶ開かれた教育環境を目指す施策等

### 開かれた学校づくり



- 学校間交流、地域や関係機関との連携を図り、諸課題に対応し、安全・安心な信頼される学校づくりを一層推進します。
  - ・だいせん防災教育「生き抜く力育成」事業
  - ・交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）推進事業（大曲西中、内小友小、大川西根小）
  - ・情報モラルいじめ対策事業
  - ・通学路等安全確保事業
  - ・国際教養大学・秋田大学や地域の高校、特別支援学校との交流
  - ・公民館等と連携した各種講座の実施
  - ・「みんなの登校日」の実施

### 学校訪問の実施

- 特色ある教育活動を支援するため学校訪問を実施します。
  - ・教育委員会訪問の実施
  - ・指導主事による教科等の指導に関する学校訪問

### 教職員研修の充実

- 今日の課題に対応した研修の充実を図ります。
  - ・いじめ・不登校や特別支援教育等、課題に応じた研修
  - ・市教職員研究会（随時別等研修）

### 教職員ネットワークの活用

- 本市学校教育の成果と課題を全教職員で共有します。
  - ・大仙市教育委員会、教育研究所のホームページで情報発信
  - ・ネットワークサーバー活用による電子ファイルの共有及び伝達
  - ・公文書の電子化運用等の充実
  - ・ICTサポーターの活用

## (5) 質疑応答

**Q 各学校において全国学力テストの結果を公表しているのか。また、各学校の平均点を公表しているのか。**

A 基本的には、各学校でも大仙市、秋田県及び全国の教科別平均正答率の値を比較する棒グラフを公表している。しかし、全国学力テスト結果はあくまで各学校指導の改善・充実や自治体の施策立案に生かしてもらうことが目的であるので、各学校の平均点は公表していない。



(丁寧な説明と質疑に回答する佐藤市長)

**Q 中学校区単位でカリキュラム委員会等を編成して、その地域に合った教育体系・カリキュラムを整備しているか。**

A 平成28年(2016年)に地域活性化に寄与できる子どもの育成を目指した中学校区単位における特色ある取り組みをわかりやすくまとめた「大仙教育メソッド」を作成し、情報の発信に努めている。このメソッドは、例えば、大曲中学校区では、小・中連携の特色ある連携に係る取り組みとして「ふるさとハロー」プロジェクトと題し、基礎となる力をあいさつ運動の充実とし、学ぶ力をみんなとつながり、外国語活動の充実とし、それを活かすために花火関連行事への積極的に参加するといった取り組みを各中学校区単位でまとめている。



(質疑に回答する吉川教育長)

**Q 小学校及び中学校の連携体制については、どうなっているのか。**

A 小学校と中学校の連携は全国的に行われているが、小学校は小学校、中学校は中学校となっているのが現状である。そこで、秋田県では、各小中学校の校長にタッグを組んでもらい、その後、研究主任と生徒指導主任がタッグを組み、当該地区の子どもたちの特徴や様子を見据え、小学校ではここまでの力を、中学校ではここまでの力を付けさせるためにはどういった授業が必要なのか考え、それぞれ取り組んでいる。

**Q 全国一を目指そうと思ったきっかけとその取り組みはいつ頃から始まったのか。また、大仙市における学力向上に特化した施策はあるのか。**

A 1960年代にはじめて行われた全国学力テストでは、秋田県の学力は「全国最低レベル」であった。そのころ、都市部と農山村の平均点数差がおおよそ20点もあったが、現在は平準化され、逆に農山村のほうがよい教科もある。秋田県では、昭和61年度から「ふるさと教育<sup>※4</sup>」を取り入れた。その後、課題解決型の授業へと改善が図られ、平成12年に「学力向上推進委員会」が立ち上がり、平成14年から県独自に県内の全小中学校を対象に中学校5教科、小学校は4教科の学力調査を行い、弱点を把握している。

また、県の施策もあることから、学力向上に特化した施策は特に行っていない。

※4 ふるさと教育とは、児童生徒が郷土の自然や人間、社会、文化、産業等と触れ合う機会を充実させ、そこで得た感動体験を重視することによって、(1)ふるさとの良さの発見、(2)ふるさとへの愛着心の醸成、(3)ふるさとに生きる意欲の喚起を目指すものである。

**Q 大仙市では、高学年の一人勉強ノートを下級生が参考にしながら学んでいると聞いたことがあるが、どのような取り組みを行っているのか。**

A 一人勉強ノートに関しては、どこの学校でもまず、一生懸命頑張って書いている、よくまとめられているのを子どもたちの目が届く位置に掲示している。1年生から6年生までのノートを掲示するので、子どもたちは上級生の一人勉強ノートを見て、勉強ってこうするんだとか、ノートってこういうふうを書くまとめられるんだということを知らず知らずのうちに見て学んでいる。

**Q 地域活性化に寄与できる子どもの育成というテーマを大仙市教育大綱に掲げられているが、この地域を支える子どもたちがどの程度踏みとどまっているのか。また、行政のかかわりは、どうなっているのか。**

A 教育大綱については、策定してからまだ2年であるため、成果として示すことはできないが、子どもたちが将来どこに行っても、この地域を誇りに思い、ふるさとの気持を大切にしたいという強い思いで一生懸命取り組んでいる。



(大仙市教育委員会職員の方々)

### ▶ 大仙市での研修の様子



(中根 光男 議長)



(古橋 智樹 副議長)



(藤井 裕一 議員)



(矢口 龍人 議員)



(鈴木 良道 議員)



(加国 豊治 議員)



(小松崎 誠 議員)



(田谷 文子 議員)



(岡崎 勉 議員)



(川村 成二 議員)



(来栖 文治 議員)



(設楽 健夫 議員)



(宮嶋 謙 議員)



(櫻井 繁行 議員)

## 2 男鹿半島・大潟ジオパークのテーマと特徴について

### (1) 男鹿市の概要

- 市制施行 昭和 29 年(1954 年)3 月 31 日 (平成 29 年は市制 63 年目)
- 人 口 28,777 人 (平成 29 年 4 月現在)  
(男 13,592 人、女 15,185 人)
- 世帯数 13,169 世帯 (平成 29 年 4 月現在)
- 面積 241.09 km<sup>2</sup>
- 概要



昭和 29 年(1954 年)、昭和 30 年(1955 年)及び平成 17 年(2005 年)に合併、編入を繰り返して誕生した男鹿市は、秋田県中西部に位置し、日本海に突き出た男鹿半島の大部分を占める。JR 男鹿線、国道 101 号が通じる。

戦国時代、津軽から安東氏が南下して脇本城が築かれ、江戸時代は秋田藩佐竹氏の支配を受けた。

市の中心は船川で、船川港の一角は秋田湾新産業都市の一部として整備され、木材コンビナート、製油所などがある。また、石油備蓄基地も昭和 58 年(1983 年)から平成 7 年(1995 年)までの 12 年間にかけて建設された。

市の基幹産業は農業と漁業で、農業は水田中心、漁業は船川港のほか戸賀、北浦港があり、ハタハタ漁が盛んだったが、近年は減少している。海岸一帯や寒風山は男鹿国定公園をなし、道路整備もあって観光客を集めている。

「ナマハゲ」の奇習と、東湖八坂神社のトウニン(統人)行事は国の重要無形民俗文化財に、赤神神社五社堂内厨子は国の重要文化財、ツバキ自生北限地帯、火山湖の一目潟は国の天然記念物に指定されている。

### (2) 大潟村の概要

- 村制施行 昭和 39 年(1964 年)10 月 1 日 (平成 29 年は村制 53 年目)
- 人 口 3,144 人 (平成 29 年 4 月現在)  
(男 1,577 人、女 1,567 人)
- 世帯数 1,038 世帯 (平成 29 年 4 月現在)
- 面積 170.11 km<sup>2</sup>
- 概要



大潟村は、秋田県北西部に位置し、日本で 2 番目の面積を誇る湖沼であった八郎潟を干拓して造った土地に昭和 39 年(1964 年)に誕生した。

八郎潟干拓は江戸時代以降、幾度か計画されたが実現しなかった。昭和 31 年(1956 年)に農林水産省の管轄で計画が立案され、翌年オランダの技術を導入して着工。昭和 41 年(1966 年)に潟面積約 2 万 2,000ha の中央に約 1 万 ha の干拓地が生れ、昭和 42 年(1967 年)から昭和 49 年(1974 年)まで入植者を募集し、全国から合計 580 戸、2,463 人が移住。西部の中心地には行政・文教・医療厚生・文化・金融機関などが集まり、中央幹線排水路に沿ってソーラースポーツラインが走り、バッテリーカーやソーラーカーのレースが行われている。

### (3) 男鹿半島・大潟ジオパークのテーマとエリア

#### ▶ テーマ

半島と干拓が育む人と大地の物語

#### ▶ エリア

「男鹿半島・大潟ジオパーク<sup>※5</sup>」は、秋田県中央部の海側、日本海に突き出た男鹿半島の大部分を占める男鹿市、その東側に隣接する、八郎潟を干拓し誕生した大潟村を範囲とする。



### (4) 男鹿半島・大潟ジオパークの魅力

日本列島のでき方がわかる地層博物館・男鹿と、日本で2番目に大きかった湖の底にできた人工の大地・大潟。恐竜がいた7,000万年前から現在までの大地の歴史、人の歴史を連続して見ることができる日本唯一のジオパーク。「男鹿のナマハゲ」に代表される歴史や文化、自然、動植物に加え、大地の豊富な恵みが育む食文化とそれらを担う人々の生活など、「人と大地の物語」に恵まれている。

### (5) 男鹿半島・大潟ジオパークの活動記録

平成20年(2008年)9月

秋田大学で行われた日本地質学会市民講演会で、白石建雄秋田大教授(当時)が男鹿・潟上・大潟地域のジオパーク構想を提唱

平成21年(2009年)12月

事務レベルによる検討・打ち合わせを開始

平成22年(2010年)3月

「男鹿半島・八郎湖ジオパーク」構想として協議会発足事務レベルによる検討・打ち合わせを開始

平成22年(2010年)10月

「男鹿半島・大潟ジオパーク」構想と名称変更

平成23年(2011年)1月

日本ジオパークネットワーク準会員加盟

※5 ジオパークとは、「地球・大地(ジオ:Geo)」と「公園(パーク:Park)」を組み合わせた言葉で「大地(地球)の公園」を意味し、地球活動でできた地層、岩石、地形、火山、断層など、地質学的な遺産を保護し、研究に活用するとともに、自然と人間とのかかわりを理解する場所として整備し、科学教育や防災教育の場とするほか、新たな観光資源として地域の振興に生かすことを目的とした事業である。

また、ジオパークは、①大地の遺産を保全(Conservation)、②大地の遺産を教育に活用(Education)、③大地の遺産を楽しむジオツーリズムの推進(Geotourism)を活動内容とする。

なお、日本のジオパークは、平成29年(2017年)9月現在、43地域の日本ジオパーク委員会によって認定されている。そのうち8地域(洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島、山陰海岸、室戸、隠岐、阿蘇、アポイ岳)がユネスコ世界ジオパークに認定されている。なお、日本ジオパークを目指す地域は18地域となっている。

平成 23 年(2011 年)2 月

国立大学法人秋田大学とジオパーク活動における連携も含めた連携協定締結 (男鹿市)

平成 23 年(2011 年)4 月

日本ジオパーク加盟申請書提出

平成 23 年(2011 年)5 月

日本ジオパーク加盟公開プレゼンテーション

平成 23 年(2011 年)8 月

日本ジオパーク委員会による現地審査

平成 23 年(2011 年)9 月

日本ジオパークネットワーク加盟認定 (9 月 5 日)



平成 24 年(2012 年)3 月

アクションプラン 2012 策定

平成 24 年(2012 年)8 月

拠点施設「男鹿市ジオパーク学習センター」開館



平成 24 年(2012 年)9 月

第 1 回東北ジオパークフォーラム開催

平成 25 年(2013 年)3 月

男鹿半島・大潟ジオパーク公式ホームページ公開

平成 25 年(2013 年)12 月

秋田県ジオパーク連絡協議会<sup>※6</sup> 設立



平成 26 年(2014 年)3 月

男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会認定ガイド誕生 (13 名)

平成 26 年(2014 年)5 月

- ▶ 渡部会長 (男鹿市長) が日本ジオパークネットワーク理事に就任 (再任)
- ▶ 男鹿半島・大潟ジオパーク認定ガイドによるガイドの会発足
- ▶ 大潟村案内ボランティアの会が、男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会認定ガイド団体となる。

平成 26 年(2014 年)10 月

第 29 回国民文化祭・あきた 2014 で「大地に学ぼうジオパークの祭典」開催

平成 27 年(2015 年)2 月

男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会新規認定ガイド誕生 (15 名)

※6 秋田県ジオパーク連絡協議会とは、男鹿半島・大潟ジオパーク、ゆざわジオパーク、八峰白神ジオパーク、鳥海山・飛鳥ジオパークの秋田県内の 4 つのジオパーク推進協議会で構成する協議会である。独自の活動として学術的な面から地域の価値を学術的な面から地域の価値を創出し、学術資料の蓄積と情報発信を図り、地域資源や地域の魅力の再発見に結びつけるための研究助成事業を実施している。

平成 27 年(2015 年)6 月

秋田県ジオパーク専門研究統括会設置



平成 27 年(2015 年)9 月

日本ジオパーク再認定審査現況報告書提出

平成 27 年(2015 年)10 月

拠点施設「大潟村干拓博物館」ジオパークコーナー拡充リニューアル

平成 27 年(2015 年)11 月

日本ジオパーク委員会による日本ジオパーク再認定現地審査 (2 日～4 日)

平成 27 年(2015 年)12 月

日本ジオパーク再認定 (14 日)



平成 28 年(2016 年)3 月

アクションプラン 2016 策定

平成 28 年(2016 年)5 月

秋田県ジオパーク連絡協議会として、秋田県知事へジオパーク活動の推進について要望書を提出アクションプラン 2016 策定

平成 29 年(2017 年)2 月

男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会新規認定ガイド誕生 (7 名)

平成 29 年(2017 年)10 月

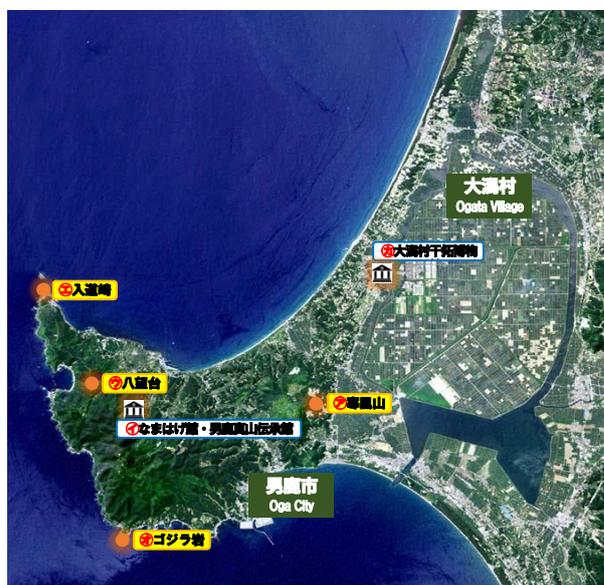
第 8 回日本ジオパーク全国大会 2017 男鹿半島・大潟大会 (25 日～27 日)

## (6) 男鹿半島・大潟ジオパークのジオサイト

男鹿半島・大潟ジオパークは、100 のジオサイト<sup>※7</sup>があり、中央部エリア、南海岸エリア、西海岸エリア、北海岸エリア(いずれも男鹿市)及び大潟エリアの 5 つに区分し、系統的に分類されている。なお、100 のジオサイトのうち、次のジオ拠点施設及びジオサイトを視察した。

- ㊦ 寒風山 (中央部エリア)
- ㊧ なまはげ館・男鹿真山伝承館 (中央部エリア)
- ㊨ 八望台 (西海岸エリア)
- ㊩ 入道崎 (北海岸エリア)
- ㊪ ゴジラ岩 (南海岸エリア)
- ㊫ 大潟村干拓博物館 (大潟エリア)

※7 ジオサイトとは、地球的科学的な価値が高く、そのジオパークを特色づける見学場所のこと。男鹿半島・大潟ジオパークでは、さらにそのジオサイト内の個々の見所をスポットと呼んでいる。





(寒風山山頂にて)



(寒風山山頂から見た男鹿半島)

### ㊦ 寒風山(回転展望台)

寒風山は標高約 355mの火山で、火山活動は今から 3 万年以上前に始まり、何度も繰り返された活動で安山岩の溶岩が積み重なって現在の形になった。その山頂に建設された回転展望台は、昭和 39 年(1964 年)にオープンし、昭和 63 年(1988 年)の改装などを経て、現在の展望台になった。13 分かけてゆっくり回転し、座りながら男鹿半島・大潟を一望できる。

### ㊧ なまはげ館・男鹿真山伝承館

「男鹿のナマハゲ」は全国的にも広く知られている行事の一つで、国の重要無形民俗文化財に指定され、毎年大晦日の夜に男鹿半島で一斉に行われる。行事を行う集落の立地や産業に合わせて、面の材質や顔、持ち物、細部の伝統が異なる。

なまはげ館では、伝統行事としての姿を知ることができる。

男鹿真山伝承館は、真山地区で大晦日に行われる行事を実際に体験することができる。また、建物は明治 40 年(1907 年)に建てられた民家を移築したもので、男鹿地域の農家建築の特色を残し、国の登録有形文化財に指定されている。



(なまはげ行事実演の様子)



(男鹿半島の八望台)

### ㊨ 八望台

八望台は戸賀湾・一ノ目潟・二ノ目潟さらには奥羽山脈・青森県境までも眼下に眺望できる景勝地。展望台から、本山、真山、寒風山を含めた景色を一望することができる。

### ㊩ 入道崎

男鹿半島の最北端で、北緯 40 度線上に位置する入道崎は、日本海を一望できる景勝地。入道崎が北緯 40 度に位置することから平成 2 年(1990 年)に建立された記念碑で、寒風山より産出される安山岩で造られている。中央にある円形の太陽の舞台には「日時計石」や「地図石」があり、その先端には真北のラインを表す「北斗の石」がある。同じ緯度には、ニューヨークや北京などの都市がある。



(入道崎)



(北緯 40 度モニュメント)



(潮瀬崎にあるゴジラ岩)

### ㊦ ゴジラ岩

約3,000万年前の火山の噴出物である火山礫凝灰岩が風化によって独特の形に削り出されたもので、怪獣ゴジラにそっくりなことから、平成7年(1995年)に名付けられた。特に口元に夕陽と夕焼け雲を重ねた「火を吹くゴジラ」が人気。

### ㊦ 大潟村干拓博物館

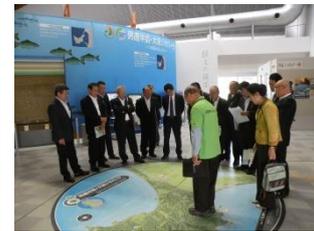
平成12年(2000年)に開館し、世紀の大事業と言われた「八郎潟干拓」から大潟村の成り立ちや文化のほか、「男鹿半島・大潟ジオパーク」についても学ぶことができる拠点施設。館内は、大潟村の歴史資料及び八郎潟干拓事業に関する資料を収集・保存しわかりやすく展示されている。

また、大潟村に入植し、これまで村を築いてきた村民自らが「大潟村案内ボランティアガイド」となり、歴史や文化などを織り交ぜながら館内を案内してくれる。

なお、平成28年(2016年)10月5日(水)には、来館者50万人を達成した。



(大潟村干拓博物館)



(ボランティアガイドによって館内を視察する様子)

## (7) 帆引き船と八郎潟

元治元年(1864年)に坂部吉蔵の三男として田伏村(かすみがうら市田伏)に生まれた坂本金吉は、明治28年(1896年)から33年(1900年)の間に秋田県浜口村芦崎(現・三種町芦崎)に居を構え、蝦樽(えびだる)やワカサギ網、帆引き網漁(全国的には打瀬網漁)などの伝統的な霞ヶ浦漁法と水産加工技術を伝え、八郎潟の漁業振興に大きく貢献した。

また、金吉によって八郎潟に伝えられた帆引き船は「打瀬船(うたせぶね)」と呼ばれ、八郎潟特有の潟船である。

八郎潟の「打瀬船」は、干拓前の八郎潟でワカサギやシラウオを採る底引き網漁に使われ、大正から昭和にかけて約100隻の打瀬船が八郎潟を往来していた。しかし、八郎潟の干拓工事が始まった昭和32年頃を境に次々と姿を消していった。

なお、金吉は、国民的歌手坂本九の実祖父である。



(帆引き船を八郎潟に伝えた坂本金吉)



(八郎潟が干拓される前の打瀬船)



(霞ヶ浦の帆引き船)

### III 感想等 ～ 視察を終えて ～

#### 1 小中学校における学力向上の取り組みについて

～ 全国学力テスト第1位は一日にしてならず ～

・ 全国学力テストで全国第1位を誇る秋田県にあたっては、さらに上位の成績を挙げる大仙市では、どのような教育が行われているか、大変興味深い視察となった。

・ 大仙市では、大仙教育メソッドを打ち立て、小中連携の9年間に有効に活用した教育が行われ、その特徴として全国学力テストの調査結果を徹底して分析・考察されている。その分析と考察は、仔細にわたり行われており、学力の弱い(不足する)ところをしっかりと把握することからはじまり、各教科における目標設定、予習や復習の状況から児童生徒の生活習慣に至るまで活かされている。

特に興味深いことは、学習環境と生活習慣がどのように学力と関連しているという分析で、単に教科書レベルでのノウハウではなく、子どもたちの生活環境全般にわたって教育の目が届くように工夫されている。本市にとっても取り入れるべき取り組みであると感じた。

・ 大仙市では、学校と地域とのつながりが強く、ボランティアを含む地域奉仕活動、祭りへの参加、キャリア体験やあいさつ運動のほか、地域活性化をテーマに様々な活動が行われており、地域を巻き込んだ活動によって、自然と愛郷心と自立心が養われている。さらに、国際的人材の育成を目的に、秋田大学との連携、ALT(外国語指導助手)やCIIR(国際交流員)の配置、オールイングリッシュによるTT指導(ティームティーチング:複数の教師が協力して授業を行う指導方法)、中学生海外派遣等が行われており、子どもたちが学習と夢が結び付くようなカリキュラムとなっている。子どもたちにとって学校は特別な場所ではなく、自分づくりの良きフィールドであるとの意識を持たせることが大切であると強く感じた。

・ 平成19年度から教育に力を入れ、目標を掲げる土台がしっかりしているからこそ先生方も競争意識があり、子どもたちをしっかり教育・育成しており、本市との違いが明らかとなった。本市においても教育目標を立ち上げ、各校長のリーダーシップを発揮してもらいたい。

・ 地域活性化に寄与できる人材とその能力を伸ばす教育として、基礎となる力、学ぶ力、活かす力の3つの力を具体化し推進しながら目指す子ども像に迫る教育は、本市の教育には、必要であることを再確認した。また、実践するために必要な知識、スキル、価値観を身に付け、学びと体験を構築していく手法も必要であると感じ、さらに学校は、地域コミュニケーションの確固たる一を占める重要な拠点であり、本市の教育において教育メソッド(方法や手法)を発信しなければ教育(学力)の向上につながらないと考えさせられた。

- ・ 大仙市における学力向上に向けた取り組みを視察して、全国学力テスト最下位からトップへと躍進した要因のほか、注目すべき学校方針と事業は、次のとおりである。また、縦割り行政を克服する学校教育主軸の体制づくりのほか、愛嬌教育の向上を整える課題の提供を受け、本市においても目指すべき児童生徒像を具体的に描き出し、中学校区単位で小中一貫教育を進め、地域で育てる学校教育連携体制は喫緊の課題であると強く感じた。なお、秋田県の奇習「なまはげ」を通じて、地域の祭礼や行事の大切さを再考させられた。

[躍進した要因]

- ㊦ 平均正答率無回答率の向上(間違いを認める教育と探求型教育)
- ㊧ 生活習慣の様子の上(起床・就寝・家庭での学校の話)
- ㊨ 平日の学習時間の向上(全国の平均よりも1~2時間多い)
- ㊩ 規範意識や思いやりの心の上(いじめの減少)
- ㊪ 体力、運動能力及び運動習慣

[注目すべき学校方針と事業]

- ㊦ キャリア教育の推進「総合的な学力育成事業」
    - ▶ 9年間を見通したキャリア教育指導計画の整備及び実践
    - ▶ 各中学校区の目指す生徒像が共有されている
  - ㊧ 大仙ふるさと博士育成事業(行事の参加や職場体験)
    - ▶ 「大仙ハローパスポート」によるふるさとを財産としたキャリア教育の推進
  - ㊨ 一人のこどもを複数の目で育てる教育
  - ㊩ 小中一貫教育が中学校区単位で進められている
  - ㊪ 教育相談体制の整備と相談活動の充実(フォローアップ体制の充実)
  - ㊫ 子どもと親と教師がつながる一人勉強ノート(学習習慣の確立)
  - ㊬ 小中学校連絡協議会や学力向上推進委員会の設立と運営
  - ㊭ 全教職員による研究集会
  - ㊮ 職務別(生徒指導主事、研究主任、鏡花主任等)研修会の実施(年1回)
- ・ 大仙市における独自の学校教育には、①共に支えあう力の育成、②創造的に生き抜く力の育成、③考え、生かす力の育成、④開き、信頼される学校の4つの柱がある。その柱を軸に20を超える様々な事業・カリキュラムを展開されており、特に、私自身子ども達と接するうえで大事にしている、ふるさと教育の推進…地域の教育力を生かし、豊かな関わりの活動を推進し、心豊かで郷土愛に満ちた人間を育成(子どもたちが自ら市内の「見どころマップ」を作成したり、国指定名勝の案内役を行ったりするもの)。国際理解・国際交流活動の推進…異文化理解を通して、子どもたちの視野を拡大(中学生派遣事業として、オーストラリアへ20名を派遣し、国際交流を行うというもの)である。本市においても「子どもミライプロジェクト」と称し、地域愛を育む事業を展開し、国際理解・国際交流の推進についても今後新たな展開を期待する。国際感覚を持った地域人即ち「グローバル」な感性を醸成し、今後のかすみがうら市の発展に寄与出来る人材の育成は必要不可欠であると感じた。

## 2 男鹿半島・大潟ジオパークのテーマと特徴について

- 平成23年(2011年)9月に東北地方で初めて日本ジオパーク委員会によって認定された男鹿半島・大潟ジオパークでは、7,000万年以前の地層を見ることができ、まさに地球の生い立ちを実感した。自然環境の厳しい地域だからこそ形成されたダイナミックな風景は圧巻。この大自然の歴史をどう表現し、伝えていくかということを秋田県と地方行政が結束してPRに取り組む姿勢が伺えた。

また、大潟村干拓博物館では、実際に入植した農家の方がボランティアガイドを務め、かつて日本第2位の面積を誇った湖がなぜ干拓されるに至ったのか、その巨大国家プロジェクトはいかに実行されたのか、入植者はどんな苦勞を重ねたのかなど大自然と人間との関わり、人々の営み、そして現在の姿までが一気に概観でき、来訪者を深く感動させている。筑波山地域ジオパークにおいても、地域文化との関係性を持たせた表現を心がけるべきと強く感じた。



(館内を案内してくれた大潟案内ボランティアガイドの樋熊正夫氏)

- 大潟村干拓博物館は、八郎潟の生い立ちのほか、大潟村で採集された貝類化石や干拓工事の手順、水の流れと管理をはじめ、地域の資源を最大限に生かして発信していることに感動した。本市としても地域の観光資源のPRや整備を具体的に進めることがジオパークの基本と確信し、地域との連携強化に取り組むべきであると感じた。
- 「ジオパーク」という名から、地層や地形といった、地質的な観点からのみ捉えがちであるが、実際は、その地域ならではの大地だけでなく、環境、自然、産業、歴史、文化、伝説など、大地の上に成り立つ自然や人間の営みが全て含まれている。人間との関わりの中で「大地」を学習できる地点のうち、認定された地点がジオパークとなり、大潟村と男鹿市にまたがる「男鹿半島・大潟ジオパーク」は平成23年2011年9月に東北で初めて日本ジオパークに認定され、「半島と干拓が育む人と大地の物語」をメインテーマとし、恐竜がいた7000万年前から現在までの大地の歴史や人の暮らしを連続して見ることができるジオパークである。また、今日の繁栄の経緯についてもボランティアスタッフの方から非常に分かりやすく説明を受け、特八郎潟の干拓と大潟村の誕生が特に印象に残っている。北緯40度、東経140度の交会点を中心にしたかつての八郎潟は、東西12km・南北27km・周囲82km・総面積2万2,024ha、約70種を超える魚介類の宝庫でしたが、昭和29年(1954年)にオランダのヤンセン教授とフォルカー技師の来日を契機として同年の世界銀行及び翌30年(1955年)の国際連合食糧農業機構FAO調査団が調査した結果、干拓事業の有用性が内外に認められた。20年におよぶ歳月と総事業費約852億円の巨費を投じた世紀の大事業は、昭和52年(1977年)3月に完了し、八郎潟の湖底は1万7,203haの新生の大地に生まれ変わった。八郎潟干拓により、湖底から生まれ変わった新生の大地に村が創られることとなり、村名は全国から募集され、将来に大きな理想と躍進をこめて「大潟村」と命名された。こうして村は、昭和39年(1964年)10月1

日に秋田県で第69番目の自治体として名乗りをあげ、わずか6世帯14人の人口でのスタートし、全国各地からの入植希望者のなかから選抜された入植者は、干拓の目的である「日本農業のモデルとなるような生産および所得水準の高い農業経営を確立し、豊かで住みよい近代的な農村社会をつくる」ことを担ったパイオニアといえる。最終的には秋田県からの入植者が323人と最も多かったです。関東地方からも16人の方々が入植された。20年にわたる干拓の歴史を通して先人たちの御苦労や情熱、また、未来への希望を肌で感じる事が出来た有意義な研修となった。



千秋公園 (Photo:小松崎 誠 議員)